

Bernard Malamud: *The Assistant*

——アメリカの夢における虚像と実像——

中 西 勝 之

バーナード・マラマッド (1914—1986) は処女作 *The Natural* (1952) で、アメリカの成功の夢を求めて、空しく苦悶する主人公ロイ・ホップスの精神的遍歴をアメリカの野球の世界と対決させながら描いてみせたが、*The Assistant* では、アメリカの夢がさらに深刻な形で求められる。ここでは、「人は倫理性のたかまりと比例して生きることの苦しみを経験する」という実存的な生の苦しみの定義が明確に提示されていると同時に、受難をテーマとするマラマッドの一貫した創作態度を示唆している。Shelden J. Hershinow が「*The Assistant* は現代のすぐれた作品であり、いまやアメリカの古典となった。これはマラマッドをアメリカの重要な作家の一人にたかめ、その名を不朽のものとした彼の文学的礎石である」⁽¹⁾ と述べるように、この作品は彼のその後の創作態度に重要な意味をもつものと思われる。

本論ではマラマッドのテーマである受難を中心軸として複雑に展開するヴァリエーションを分析し、マラマッドの創作の特質にふれると同時に、主人公モリス・ボーバー、フランク・アルパインそれに、ヘレン・ボーバーの三人がアメリカの成功の夢に賭けて経験する受難の精神的軌跡をたどりながら、それぞれの identity 追求における虚像と実像をとらえてみたい。

(1)

モリス・ボーバーはニューヨークの下町ブルックリンの片隅で、小さな食料雑貨店を営みながら、妻のアイダと娘のヘレンをほそぼそながら養っ

ている。毎朝6時に起きて、重い牛乳箱を店に運び入れるのが、モリスの誠実な日常生活における苦役のはじまりである。もうすでに60才を越えたモリスは、若い頃、ロシアから亡命してきたユダヤ系移住者の一人であるが、21年間も、同じ場所で同じパターンの生活をくり返している。近所では、多くの店が、モリスから見れば商道に反するやり方ではあるが、新しい近代的な商店へと様変わりしてゆくなかで、モリスの店だけは「21年たっても、ほとんど変わっていない。店を塗り変えたことが二度、新しく棚をつけ足したのが一度」⁽²⁾ だけで、10年前に地面に落ちた看板も二度と、もとどおりにつけかえることもしない。モリスにとって、商売は利益を上げることではなく、お客に奉仕することが中心で、利益はその代償として得られるものである。したがって、モリスは物質的な運とはほど遠い存在である。

The grocer, on the other hand, had never altered his fortune, unless degrees of poverty meant alteration, for luck and he were, if not natural enemies, not good friends. He labored long hours, was the soul of honesty—he could not escape his honesty, it was bedrock; to cheat would cause an explosion in him, yet he trusted cheaters—coveted nobody's nothing and always got poorer. The harder he worked—his toil was a form of time devouring time—the less he seemed to have. He was Morris Bober and could be nobody more fortunate. With that name you had no sure sense of property, as if it were in your blood and history not to possess, or if by some miracle to own something, to do so on the verge of loss. At the end you were sixty and had less than at thirty. It was, she thought, surely a talent. (pp. 16~17)

モリスの仕事は「暗く長いトンネルのような店」(p. 4) で、夜の11時まで少ない客を待ちくたびれることである。ときどき、裏部屋で休息する以

外、彼は、ほとんど「外へ」出ることもなく「内のなか」すなわち、「店という墓場」(p.6)のなかに埋葬されてしまっている。Ihab Hassanが指摘するように「時間は、失敗が生み出す虚無のなかに人物をとちこめたまま」⁽³⁾である。ここでは時間が事態を解決することは一切ない。

このように、マラマッドは作品の冒頭から、時代の繁栄の裏に落ちぶれるモリスの生活貧困の十字架を自然主義的なタッチで述べているが、街の大通りと裏通り、繁栄と貧困、進歩と停滞、誠実と不運、内と外などの対照に見られるように、物事を多面的に見つめ、つねに、表と裏、光と陰の対極のなかにとらえようとする。この二重性の構造はマラマッドの作品のすべてに見られる「彼の創作技法の特質」⁽⁴⁾を表わすものであるが、主人公は陰の部分〈恵まれない存在〉でありながら、いつしか光の部分〈再生〉に変わってしまうという幻想的な形式をもって表わされる。

モリス・ボーバーの店の近くには、同じユダヤ系アメリカ人の店が他に二軒ある。貧乏な靴屋から禁酒法の解禁に乗じて酒屋に転じ、いまや一財産をなしたカープ家と、競馬で幸運をつかみ、息子を大学に通わせる菓子屋のパール家は、ボーバー家をはさんで、この異教徒社会で「小さなユダヤ部落」(p.16)を構成している。二人の強盗がカープの店の売り上げ金を狙っているが、実際には、貧乏なモリスの店を襲ってしまう。モリスは一日の総売り上げ金13ドルを奪われたあげく、ピストルで殴打される。

The one in the dirty handkerchief raised his gun. The other, staring into the mirror, wrved frantically, his black eyes bulging, but Morris saw the blow descend and felt sick of himself, of soured expectations, endless frustration, the years gone up in smoke, he could not begin to count how many. He had hoped for much in America and got little. And because of him Helen and Ida had less. He had defrauded them, he and the bloodsucking store.

He fell without a cry. The end fitted the day. It was his

luck, others had better. (pp. 26~27)

一撃をくらって倒れたモリスの頭に去来するものは自己嫌悪感であり、アメリカの成功の夢の完全な挫折感である。立ち枯れになった数々の期待、果てしない挫折と無駄な歳月、すべてこれらの結果が「今日という日にふさわしい幕切れ」であることをモリスは痛感する。不運を背負うのは、つねに、貧しい弱い者である。強盗に襲われたのは金持のカープの店ではなく貧しいモリスの店であるところにマラマッドのパラドックスあるいはアイロニックの様相が伺われる。「酔っぱらいがカープの店の窓をめがけて石を投げるのに、実際に割れたのはモリスの店の窓」(p. 22)なのである。

モリスは若い頃、ヨーロッパでのユダヤ人虐殺の風潮のなかで、ロシアからアメリカへ亡命してきた。アメリカはモリスにとって新天地であり、成功の夢を実現させるはずの再生の地であった。モリスは薬剤師になるために夜学にも通ったし、ドイツ語や英語も勉強した。しかし、結婚と同時に、一旦この雑貨店におさまって以来、「濃い油で揚げられた魚同然」(p. 83)になってしまう。ロシアからの脱出はモリスにとって「出エジプト」(the Exodus)であったが、アメリカの繁栄と物質主義のなかで、彼は再び捕われの身となる。「長いトンネルの穴」「店とい牢獄」「油で揚げられた魚」も、すべて現実の世界に幽閉された人間の精神状態、いうなれば、「気も遠くなるような長い苦難の歴史を背負わされたユダヤ民族」の運命を暗示させる。貧困と苦役のなかで、誠実に汗して働きながら、いつも、幸運から見離された人間(Schlemiel)として、モリスは、なおも、その誠実さのなかに誇りと尊厳を見出さねばならない。苦難をとおしての倫理性の高揚のなかにモリスの identity の模索がある。

強盗に打ちのめされたぶざまな姿がモリスの現実の姿であり、同時に、モリスのアメリカの夢の挫折を表わしている。〈が実は、この作品には強盗の一人であるフランク・アルパインが己れの罪を贖うためにモリスの店を助け、モリスの精神を学びながら彼自身が救われるというパラドックス

が含まれている〉アメリカの実用主義と物質界におけるモリスの夢は挫折しても、苦難による精神的な意味での再生が真の成功という結果を招来する。すなわち、外面的な「物質的アメリカの成功の夢」という虚像は、実は、内面的な「精神的再生」という実像を含有している。

(2)

フランク・アルパインは25才のイタリア系アメリカ人であるが、西部から東部へと同じくアメリカの夢を求めて流れついた放浪者、あるいは、社会から完全にはみ出した部外者である。流れ者としてのフランクの最初のアメリカの夢は「罪を犯して運を開き、冒険をして王侯の暮らしをする」(p.192) ことである。が、実際に強盗に荷担し、モリスの店を襲ったのちのフランクは、ひたすらに、贖罪に苦しむ青年として登上する。罪の告白は過去の自分を暴露することにより自からを浄化することであり、罪の贖いはモリスの店を助けて、盗んだ金を返すことにより自からを救済することである。フランクは贖罪という苦しみの十字架を背負うことになるが、「生まれたつぎの週には母親と死別し、5才のときに父に逃げられて孤児院に預けられ、8才のとき里子に出されて以来10回も家出」(p.36) して、転々と放浪しながら歩いてきたフランクのなかに、はじめて、人間の倫理性への目覚め、すなわち、人生の裏から表へ、陰から光へ向う能動的な生への徴候が現われてくる。

フランクもモリスと同じく苦難を背負いながら、いつでもどこへ行っても報われない。「無一物で入り、無一物で出てくる」(p.37) という、およそアメリカの成功の夢とはほど遠い存在である。モリスは店の地下室に眠っているフランクを哀れに思い、自分の頭の傷が治るまでフランクを店で働かせることにする。強盗から受けたモリス頭の傷が悪化したために、フランクが店で働けるのは皮肉な結果であるが、マラマッドが好んで用いるアイロニックな技法の特質である。

フランクがモリスの店に執着するもう一つの動機は、放浪生活から立ち直って固定した生活を身につけたいことと、モリスの娘ヘレンに心を引かれることである、これはフランクのアメリカの夢に対する変化を示すと同時に、善と悪の間を揺れるフランクの心理状態を表わしている。

Although his hours were long — six to six, at which time she served him his supper — Frank was content. In the store he was quits with the outside world, safe from cold, hunger and a damp bed. He had cigarettes when he wanted them and was comfortable in clean clothes Morris had sent down, even a pair of pants that fitted him after Ida lengthened and pressed the cuffs. The store was fixed, a cave, motionless. He had all his life been on the move, no matter where he was; here he somehow couldn't be. Here he could stand at the window and watch the world go by, content to be here.

(p. 58)

固定した店にいれば、風雨をさけて、内側から窓をとおして、「流転する外部の世界」を見ることができる。これまで、自から放浪することをやめたことがないフランクは内側から窓ごしに逆投射した自分の姿を見ることができる。店はモリスにとっては「戸口の開いた墓場」であるが、フランクにとっては憧れの地である。モリスは内から外へ、フランクは逆に、外から内へ志向する。このような状況、立場の対立、逆転はマラマッドが、数々の作品で見せる技法の一つである。

ヘレンの目に映るフランクは「なにかに憑かれているようで、飢えて悲しげな様子」(p. 31)である。母親のアイダにとっても、ヘレンにとってもフランクは非ユダヤ人以上に得体の知れない秘密をもった人物として映る。アイダはヘレンをフランクに近づけまいと、あらゆる努力をするがヘレンの心は次第にフランクを意識するようになる。

ヘレンは一家の生計を助けるために働きながら、大学進学を夢を捨て切

れず夜間の大学に通っている。ヘレンのアメリカの夢は昼間の大学に行つて、社会に必要な高い教育を身につけることである。彼女は両親がひそかに望んでいるパールの息子でコロンビア大学院で法律を学んでいるナットへの思いが、いま一つ断ち切れないうまでである。彼女は、かつて、「半ば恋心から」(p.14) ナットに自分の貞操を許してしまったことを、いまでも痛恨している。ナットは社会的にも物質的にも将来性のある、しかも、ユダヤ系で、両親がすすめる理想的な男性であるが、ヘレンは物質的あるいは肉体的なものよりは、愛、すなわち精神的なものを志向する。肉体的な行為から愛をはぐくむのではなく、愛する気持を互いに高めることから愛の行為がはじまらなければならない。ヘレンはナットに見出せないものをフランクのなかに見出そうとするが、ヘレンの心は、なお、ナットとフランクの間を——すなわち、物質的なもの〈虚像〉と精神的なもの〈実像〉の間を時計の振子のように揺れ動いたままである。

(3)

ここから、ストーリーの展開はフランクのモリスに対する罪の贖いと、ヘレンに対する愛と苦悩のジレンマが中心となる。フランクは贖罪において物質的な面〈盗んだ金を返すこと〉では順調であるが、精神的な面〈罪を告白すること〉では未解決であり、それ故、苦悩から解放されないままである。店の売り上げも上昇し、ポーバー家の生活も安定するが、フランクは毎日の売り上げのなかから、小銭をピンハネして、こっそり貯金をはじめる。フランクの心理状態は悪のスリルに引きずられて放浪しながら、内面では二重の罪意識に、ますます苦しまねばならない。

Thus he settled it in his mind only to find himself remorseful. He groaned, scratching the backs of his hands with his thick nails. Sometimes he felt short of breath and sweated profusely. He talked aloud to himself when he was alone,

usually when he was shaving or in the toilet, exhorted himself to be honest. Yet he felt a curious pleasure in his misery, as he had at times in the past when he was doing something he knew he oughtn't to, so he kept on dropping quarters into his pants pocket. (p. 69)

ここでは善と悪に対するフランクの心の葛藤がみられるが、Shelden J. Hershinow が述べるように「悪のなかに一つの喜びさえ見出すマゾヒズム的な心理状態」⁽⁵⁾をフランクのなかに読みとることができる。

ヘレンに対するフランクの思慕も、純粋な精神的な愛と肉体的な欲求の間を大きく振幅する。フランクはヘレンを肉体的になんとかものにしたい衝動にかられるまま、ヘレンの入浴姿を覗くため食品用エレベーターの通風孔のなかをよじ登る。窓越しに彼女の裸体を盗み見しながら、彼は「痛いほどの疼きを感じ、彼女を愛したい欲求にかられる」(p. 75)が同時に一種の喪失感におそわれる。

Her body was young, soft, lovely, the breasts like small birds in flight, her ass like a flower. Yet it was a lonely body in spite of its lovely form, lonelier. Bodies are lonely, he thought, but in bed she wouldn't be. She seemed realer to him now than she had been, revealed without clothes, personal, possible. He felt greedy as he gazed, all eyes at a banquet, hungry so long as he must look. But in looking he was forcing her out of reach, making her into a thing only of his seeing, her eyes reflecting his sins, rotten past, spoiled ideals, his passion poisoned by his shame. (pp. 75-76)

ヘレンに対する肉体的欲求を深めれば深めるほど、フランクの心からヘレンは離れてフランクの手の届かない地点に逃げてしまう。彼の肉体と精神のギャップはますます大きくなる。ヘレンの裸体はフランクの肉眼では実像として映るが、心眼では虚像にすぎない。覗きから地下室へもどったフ

ランクには予想したほどには後悔の思いはなく、かえって、「心の湧きたつ喜びさえ感じる」のであるが、ここでも「小銭を盗む快感」と同じくマゾヒズム的な心理が現出している。

このように、ランクは〈モリスの店にとってもヘレンにとっても〉物欲的な悪と精神的な善の両極間を大きく振幅しながら苦悩する人間の典型である。さらに彼は過去の罪を清算し、そこから抜け出し、現在から未来へ新たに出発したいという欲求にかられながら、その過去から一步も抜け出すことはできない。マラマッドは過去の罪という苦悩の十字架を逃れて、現在も未来も存在しないことを示唆している。しかし、この回避できない苦悩のなかから、ランクはモリスの苦難と忍従のユダヤ的生き方を学びながら、Peter L. Hays が述べるように「モリスの精神的息子」⁽⁶⁾へとだんだん近づくのである。

一方、ヘレンはランクに対して強い疑念を抱きながら、ランクを愛しはじめる。よそ者としてのランクは、もはや、よそ者ではなく「上品で彼女がほれほれするような期待できる」(p. 130) 人物である。しかし、ランクを愛することに対して、ヘレンには解決しなければならない障壁がある。それはランクが異教徒だということであるが、しかし、これは愛の充足感からすれば大したことではない。愛の力は異教徒の壁を越えることができる。心配なのは自分自身に対してではなく、他者〈両親・民族〉に対してである。

Although she had only loosely been brought up as Jewish she felt loyal to the Jews, more for what they had gone through than what she knew of their history or theology — loved them as a people, thought with pride of herself as one of them; she had never imagined she would marry anybody but a Jew. But she had recently come to think that in such unhappy times — when the odds were so high against personal happiness — to find love was miraculous, and to fulfill it as

best two people could was what really mattered. Was it more important to insist a man's religious beliefs be exactly hers (if it was a question of religion), or that the two of them have in common ideals, a desire to keep love in their lives, and to preserve in every possible way what was best in themselves? The less difference among people, the better; thus she settled it for herself yet was dissatisfied for those for whom she hadn't settled it. (p.132)

彼女はユダヤ人としての誇りをもっている。それは民族の歴史や宗教ではなく、ユダヤ人が経てきた「過去」に対してである。これは「過去を離れて、現在も未来も存在しない」というマラマッドの思想の根底を暗示しているが、さらに、ヘレンのユダヤ人としての民族的な identity から自由な愛を求めるヘレンの個人的な identity への精神的な軌跡を示している、と同時にアメリカの国家社会が内抱する個人と全体にかかわる多民族的文化の融合の問題を提起している。

(4)

二人の男性、ナット・パールとフランク・アルパインに対するヘレンの態度もいっそう明確なものとなる。ナットは大学院の法科を出て「裕福な生活を送るために大金を儲けること」(p.133)であるが、一方、フランクは「人間として己れ自身を実現したい」(p.133)と願っており、この両者は、それぞれ物質的なものと精神的なものとの両極で対立している。ヘレンはフランクに彼女の夢をかける。ヘレンのアメリカの夢は、自から大学教育を受けると同時にフランクにも大学教育を受けさせ、二人は、やがて結婚してニューヨークを逃げ出しカリフォルニアに住み両親を近くに呼び、孫たちの世話をさせることである。

ところで、ヘレンの純粋な愛の対照であるフランクは肉体的欲求と精神的欲求のジレンマに苦しまねばならない。ヘレンに「待たされる」ことか

ら、フランクは「規律に服した人間」(p. 140) を志向し、克己の精神に自から目覚めてゆく。これは肉体的なものをヘレンに求めながら、実際には精神的なものを求める結果になるというマラマッドのパラドックスの技法を示している。

フランクはモリスに対して罪を告白することができないままである。フランクの心は罪意識に責められながら、一方では、「罪を告白し現在の安定した生活を壊わすこともあるまい。過去は、所詮、過去であり、いまさらどうにもならない。大事なのはこれから先であり明日である」(p. 158) という意識の両極を揺れ動く。だが、物質に執着しながら過去から逃げようとするかぎり、フランクは罪意識の苦悩から逃れることはできないし、真の自己発見もできない。

しかし、フランクには生来「苦勞性の良心」(p. 157) といえるものがある。彼はその良心のために苦しみ、ヘレンへの愛によって克己の精神に目覚めることもできる。彼はピンハネした金をレジに戻すことを実行するが、〈そのあとで、皮肉にもヘレンからデートを申し込まれ、手持ちの金がなくなり〉一旦返した金をレジから取り戻そうとするところをモリスに見つかり、ついに店から追放されてしまう。実は、ヘレンからのデートの申し込みは、ナットに対する彼女の気持を清算し、フランクに対して「心から愛しあっている」(p. 163) ことを告げるため、すなわち、フランクの「待望」を実現させるためである。深夜、公園のなかでフランクを待つヘレンは、突然、暗闇から現われたウォード・ミノグ〈強盗の主謀者〉に襲われるが、危うく、フランクに助けられる。しかし、その場で、ヘレンはフランクに半ば強引に犯されてしまう。

He put her down and they kissed under the dark trees.
She tasted whiskey on his tongue and was momentarily afraid.

“I love you, Helen,” he murmured, attempting clumsily to cover her breast with the torn dress as he drew her deeper

into the dark, and from under the trees onto the star-dark field.

They sank to their knees on the winter earth, Helen urgently whispering, "Please not now, darling," but he spoke of his starved and passionate love, and all the endless heart-breaking waiting. Even as he spoke he thought of her as beyond his reach, forever in the bathroom as he spied, so he stopped her pleas with kisses.

Afterward, she cried, "Dog — uncircumcised dog!"

(pp. 167-168)

ここでは、皮肉が皮肉を生むというマラマッドのアイロニックの手法が見事に表現されている。フランクはヘレンを肉体的に奪うことによって、それまで、ひたすらに待ちつづけたヘレンの愛を、いま一步というところでとり逃してしまふ。肉体的欲求と精神的欲求の葛藤のはざままで、フランクの肉体的欲求の勝利はヘレンの肉体を勝ちとるが、これは同時にフランク自身の精神的な敗北であり、ヘレンの精神的な愛を喪失することになる。肉体的欲求は実存するフランクの生の実像であるが、実際は、虚像である。マラマッドはこのように立場の逆転、並置、二重性の意味を巧みに用いる。

フランクは強盗に荷担しながら、店の金をピンハネしたうえ、ヘレンの肉体まで奪ってしまった自分の罪を厳しく告発しなければならない。彼が心に秘めていた己れの人間としての尊厳は、どう見ても「一匹の死んだねずみ」(p. 175)にしか過ぎない。彼は罪を重ねながら、ますます、罪の悔恨という「己れの牢獄」(p. 192)に閉じこめられてしまふ。フランクは罪の贖いから自からの手で彫り上げた「咲きかけの木のバラ」をヘレンにおくるが、それはつぎの朝、ゴミ屑のなかに捨てられたままである。

フランクは罪意識の苦悩に耐え切れず、ついに、モリスに自分が強盗に荷担したことを告白する。しかし、モリスは、すでに、そのことに気がつ

いていて、フランクの罪を許しているのであるが、フランクを店に雇っておくことを許さない。フランクが追放されたあとの店は、いよいよ窮地に落ちこみ、モリスは職を求めて歩きまわる。

“How old are you?”

“Fifty-five.”

“I should live so long till you see fifty-five again,” said the manager.

At Fiftieth he went up a dark staircase and sat on a wooden bench at the far end of a long room.

The boss of the agency, a man with a broad back and a fat rear, holding a dead cigar butt between stubby fingers, had his heavy foot on a chair as he talked in a low voice to two gray-hatted Filipinos.

Seeing Morris on the bench he called out, “Whaddye want, pop?”

“Nothing. I sit on accnunt I am tired.”

“Go home,” said the boss.

He went downstairs and had coffee at a dish-laden table in the Automat.

America. (p. 209)

自動販売式食堂の皿だらけのテーブルでコーヒーを飲みながら「アメリカよ！」とつぶやく言葉には、モリスのアメリカの夢への深い思いがこめられている。モリスには物質的なアメリカの夢は、さらに55年生きつづけても、永遠に訪れないのである。

絶対絶命の窮地に追いこまれたモリスのもとに、黒っぽい外套を着たやせこけた男が訪ねてくる。マラマッドは色を巧みに用いるが「白は希望、幸福、再生への前兆などを表わし、黒は絶望、災難、不幸など不吉なものを象徴する」⁽⁷⁾ 場合が多い。この人物はモリスの店に保険金をかけて火をつける仕事を請け負いたいという。

この人物の登場から、ストーリーの展開は急に幻想的な様相をおびてくる。このように象徴的手法への移行はマラマッドの多くの作品に見られる技法の一つである。モリスはこの死神を追い返したあと、部屋でセルロイドの束に火をつけるが、燃えたのは店ではなく、自分のエプロンで、危うく火傷するところをフランクに助けられる。皮肉なことに、その夜、商売がたきのカープの酒屋が火事になってしまう。保険金がたっぷり入ったのはモリスの店ではなくカープの店である。悪運の強い人間は転んでも損をしない。不幸な人間は、どこまでも運に見離された人間 (Schelemiel) である。

(5)

四月になって雪が降り、モリスは春の雪に感動しながら、道路の雪かきをする。が、それが原因で肺炎をこじらせ、死別した息子エフレイムの夢を見ながら息を引きとる。

He dreamed of Ephraim. He had recognized him when the dream began by his brown eyes, clearly his father's.

"I gave you to eat three times a day, Ephraim," he explained, "so why did you leave so soon your father?"

Ephraim was too shy to answer, but Morris, in a rush of love for him—a child was so small at that age—promised him a good start in life.

"Don't worry, I'll give you a fine college education."

Ephraim—a gentleman—averted his face as he snickered.

"I give you my word....."

The boy disappeared in the wake of laughter.

"Stay alive," his father cried after him. (pp. 225~226)

子供に大学教育を受けさせることはモリスのアメリカの夢であった。「心配するな。立派な大学教育を受けさせてやるから」というモリスの言葉に

エフレイムは「顔をそむけて忍び笑い」をする。この忍び笑いは、おそらく天国のエフレイムがモリスの「アメリカの夢の空しさ」〈物質的な夢を求めるモリスの虚像〉を暗示しているものであろう。

モリスの生涯は彼がアメリカを求めてロシアから亡命して以来、物質的な運から、まったく見離され、彼は、ひたすら誠実さのなかに生きる苦痛を耐え抜くことに終止した。そこにはアメリカの進歩や繁栄とは無縁の「人間が古来永劫に苦しみつづけた歴史」、すなわち、ユダヤ民族の歴史そのものを暗示させる生き方がある。葬儀に当たったラビの言葉では、「モリスはモーゼの律法を忠実に守り、苦しみに耐え抜いた人間」(p. 229)である。しかし、ヘレンにとって、モリスはこの世では生きていけないほど「正直すぎる」人間で、「自分のものを欺しとられても相手を信用する人間」(p. 230)である。店という墓穴に自分を埋めつくし、「自分から自分を犠牲にしてしまった不幸な人間」(p. 230)である。このモリスの受難のテーマをさらに補強するのは、作品のなかに影の存在として現われる行商人プライベートとアル・マーカスの二人である。この両者は人間の苦難をすべて背負ったヨブ的な存在であるが、モリスのもう一つの精神的な影を思わせる。

埋葬のとき、墓穴の棺の上に、ヘレンはバラの花を一輪投げる。フランクはそのバラが落ちるのを覗きながら、足のバランスをくずし、自から棺の上に転げ落ちる。いかにも、ぶざまであるが、この悲喜劇的な様相はフランクのヘレンへの純愛を示すと同時にモリスの精神的な影を追うフランクの姿を暗示している。フランクはモリスの死後、店にもどり、ボーバー家の生活を支えることで、己れの罪の贖いを果たし、ヘレンの愛をとりもどすことによって自からの再生の道を見出そうとする。フランクの生きる道はそれ以外にはない。しかし、罪の贖いも、ヘレンとの愛による再生への道も、いずれも、フランクにとっては厳しい受難に耐えることにほかな

らない。ヘレンの愛が深まれば深まるほど、フランクの罪意識は心の奥底で疼痛する。フランクは精神的苦悩を背負ったまま、昼間は、モリスの店で働き、夜は、深夜営業のコーヒー・ポット店で翌朝まで、ふらふらになるまで働く。「次第にやせ細り、首はやせこけ、顔は骨ばって」(p. 241) しまったフランクの苦悩の様相には、現実の者とは思えない超人的なものを暗示させるものがある。

一方、ヘレンは一月のある夜、バス停留所の近くで、コーヒー店で働くフランクの姿を見かける。「過労と悔恨のためにふらふらになり、やせこけた惨めなフランクの姿」(p. 242) を窓越しに見て、彼女は、フランクの精神的、肉体的疲労と消耗の陰に自分が存在していることを悟ると同時に、フランクが別人に「変身」しているのを見出す、ヘレンの自己発見は、そのまま、フランクの変身と意識的に重なって現われている。

3月の朝、フランクは深夜の仕事からもどり、食料品店で聖書を読んでいるが、聖書のなかには「自分でも書けそうな個所がいくつかある」(p. 245) と思う。これはフランク自身の変身と同時に再生を意味している。

Aa he was reading he had this pleasant thought. He saw St. Francis come dancing out of the woods in his brown rags, a couple of scrawny birds flying around over his head. St. F. stopped in front of the grocery, and reaching into the garbage can, plucked the wooden rose out of it. He tossed it into the air and it turned into a real flower that he caught in his hand. With a bow he gave it to Helen, who had just come out of the house. "Little sister, here is your little sister the rose." From him she took it, although it was with the love and best wishes of Frank Alpine.

One day in April Frank went to the hospital and had himself circumcised. For a couple of days he dragged himself around with a pain between his legs. The pain enraged and inspired him. After Passover he became a Jew. (pp. 245~246)

ゴミ箱から木彫りのバラの花を拾い出し、それをヘレンに捧げるのは聖フランシスであるが、実は、聖フランシスはフランクの精神的投影である。「木彫りのバラ」は現実であり、物質的なものであるが、空中で「ほんもののバラの花」という超現実的で精神的なものへと変わる。「木彫りのバラの花」は肉眼では実像であり、心眼では虚像なのである、がしかし、この虚像は、いつしか、実像に変わっているのである。

さらに、病院で「割礼を受けること」については、これまで様々な批評がなされている。たとえば、Peter L. Hays は「豊饒の女神であるヘレンに対する去勢あるいは従属である」⁽⁸⁾ と述べ、Ihab Hassan は「自己否認である」⁽⁹⁾ と指摘する。いずれも、当を得た批評と思えるが、しかし、これはフランクのユダヤ教への改宗はもちろん、フランクの精神的浄化、再生を表わすと同時に、民族的融合と人間精神の普遍性を象徴していると思われる。葬儀で、ラビが述べるように「モリスは20年間一度もユダヤ教会に足を向けたことはなかった」(p. 229) し、彼は、むしろ、ユダヤ教儀にとらわれない「普遍的な人間」の生活を求めた人間〈ユダヤ人〉だったのだから。

ストーリーの展開における秋から春への二回転は Peter L. Hays が指摘するように「死と再生の輪廻の型を象徴づける」⁽¹⁰⁾ ものであろう。さらに、マラマッドの特異とするストーリーの結末におけるアイロニックで幻想的な屈折が、この作品でも見られるが、この現実的世界から超現実的世界への変化により、マラマッドの世界は無限の意味と想像を読者にゆだねることになる。

(6)

マラマッドは彼の創作態度において受難から再生に至る人間の精神的軌跡を、つねに、一貫したテーマとして追求する。たとえば、Charles A. Hoyt が「ユダヤ的苦しみは、マラマッドにとっては、彼の創作の要素で

あり本質でもある。そこから、彼は無二の美と誠実さの作品を生み出した⁴¹⁾と述べるように、彼の作品は、いずれも、「苦しみ」を中心として、そこに無限に広がるヴァリエーションを展開して見せる。むしろ、「ユダヤ的苦しみ」という場合のユダヤ的とは、マラマッドの場合、日常的な言葉の意味を超越し、すべての人間に共通する「普遍的な苦しみ」を意味する。

さて、*The Assistant* の作品構成は、様々な変化にとむ複雑な要素をもっている。この作品は、アメリカの夢、罪の贖い、恋愛、受難から再生に至るテーマを縦糸に設定し、典型的な登場人物〈Hays が述べるように「モリス・ボーバーはマルチン・ブーバーを、フランク・アルパインは聖フランスを、ヘレンは月の女神、豊饒の女神」をそれぞれ原型とする⁴²⁾を縫い針として描写し、彼らの動機づけ、環境、思想を象徴的な織り糸として、その針穴に通して、そこから様々な行動のドラマが展開され、人間精神が生み出す複雑な模様的美を織り上げて見せる。その展開には、二重性、並置、逆説、アイロニーの要素をもってはじまり、屈折と象徴主義的な要素をもつ曖昧さの形式をもって終るというマラマッド特有の創作技法が見られる。

さらに、この作品は、Walter Shear が述べるように「基本的には二つの文化、ユダヤ伝統とアメリカ文化〈古い世界の智慧と新しい実用主義世界の知識〉が衝突し、ある程度同調しながら、リアリスティックな審美さで描かれた社会的記録の模様⁴³⁾を提示する。「アメリカの実用主義」と「アメリカの成功の夢」との間の内的葛藤を表わしながら、モリス・ボーバーに代表される古いユダヤ精神がアメリカの新しい世界に、どのように結合し、融合してゆくかの問題を提起している。

マラマッドのユダヤ人(または非ユダヤ人)は Theodore Solotaroff が指摘するように「宗教的、社会的な結びつきによるものではなく、失敗、不幸、悲しみ、間違いによる損失、美德による少ない報酬による人間の相互作用⁴⁴⁾のなかにある。すなわち、それは宗教とか民族を超越した人間

の普遍性に基くものであり、そこに、マラマッドのアメリカにおける民族的文化の融合の本質がある。

アメリカの実用主義のなかで、成功の夢を追い求める主人公モリス、フランク、ヘレンの実存的な生の意味は表面的には、それぞれ異種のものであるが、本質的には同一のものである。モリス・ボーバーは Hays が指摘するようにマルチン・ブーバー (Martin Buber) を原型にしていることは、名前の類似性からも容易に推察できる。モリスのアメリカの夢はロシア亡命からはじまる。新天地アメリカでの精神的な自由とアメリカの物質主義の繁栄を憧れながら、モリスには新天地での夢の実現はかなえられない。ユダヤ人としての「苦難の歴史の重荷」を背負ったまま、「店という牢獄」に捕われながら、物質〈繁栄〉を求めるモリスは、事実上の敗北者であり、実用主義アメリカの新しい社会に適應できない人間である。モリスを外面的には実存的敗北者の実像としてとらえることができる。しかし、この実像は、実は、虚像であって、モリスの実像は内面的な世界にある。モリスは外面的には、物質的に「何んの報酬も得ないで無駄な人生を終り」(p. 226) ながら、実は、内面的には精神的継承者としてのフランク・アルパインという大いなる報酬を得たのである。

モリスの生き方はユダヤ主義伝統 (トーラー) に基く高い倫理観である。それは同情、善、誠実さをもって苦難に耐えて生きることである。しかし、倫理性を高めれば高めるほど人間は、逆に苦しまねばならない。Iska Alter が述べるように「善人は自由を犠牲にしてのみ、日和見主義に落ち入らないで、欺瞞、ごまかし、墮落から魂をまもる」¹⁰⁵⁾ ことができる。さらに、この思想は Hays が指摘するように、人間は「the I-It (我と物) の関係を拒否し、the I-Thou (我と汝) の関係を受容することによって、人間社会における全人格的な自己を完成する」¹⁰⁶⁾ というマルチン・ブーバーの思想をマラマッドがモリスのなかに証明しようとしたものであろう。物ではなく汝〈人間〉とのかかわりのなかで倫理性をたかめながら、

己れの苦しみに耐え抜くとき、人間は己れの identity を見出し、再生への道は開かれる。このように、ユダヤ的伝統精神をアメリカ社会に普遍的な形で実現させようとする努力と、それにともなう受難のなかにモリスの実像をとらえることができる。

フランクは強盗に荷担した贖罪と、ヘレンへの肉体的欲求の二重の苦しみを経験しなければならない。フランクは表面的には放浪者、罪人として登場する。彼のアメリカの夢もアメリカの繁栄のなかの物質的なものへの憧れであり、ヘレンに対する肉体的欲求にあるが、それを過去から逃れて現在から未来に求めようとするところに彼の矛盾が生じる。過去を離れて現在も未来も存在しないのである。また、ここでも、「我と物」の関係に苦しむフランクの実存する姿を実像としてとらえることができるが、この外面的な実像は、実は、虚像であって、フランクの実像はモリス同様「我と汝」の精神的なものの追求のなかに見出される。物質的あるいは肉体的な欲求を深めれば深めるほど、また、過去から逃れようとするほど、夢は遠ざかり、フランクは精神的窮地に追いこまれ、苦難の度合を深めながら、今度は逆に、人間的倫理性に目覚めてゆくが、その内的葛藤の陰影部分にフランクの実像をとらえることができる。フランクの影として現われる聖フランシスはフランクの精神的実像を象徴するものであろう。

ヘレンは Walter Shear が述べるように「美と愛の象徴」⁴⁷⁾であり、Hays が指摘するように「豊饒の女神」でもある。しかし、実存するヘレンの姿は己れの無知による過失で汚された過去の傷を背負って「店という牢獄」から一步も抜け出せないまま、過去と未来の間の現実というギャップに苦しむ女性である。彼女のもう一つの苦しみは二人の青年ニックとフランクに対する二者択一のなかにあるが、ニックは物質的なものを求める権化であり、一方、フランクは精神的なものを求める受難者である。彼女のアメリカの夢は大学教育を正規に受けて、物質的、社会的な地位を得て安定した生活を送ることである。彼女が求めるアメリカの夢の外面的な実

像は、モリスとフランクの場合と同じく「我と汝」ではなく「我と物」にある。しかし、この外面的な実像は、実は、虚像であって、実像は精神的なもの、すなわち、「我と汝」の内面的なものの中にある。彼女が、単に、物質的なものを求める限り、彼女には安定はないし、精神的に迷い苦しまなければならない。が逆に、その迷いと苦しみによって「我と汝」を受容できるようになるという精神的自己覚醒の中かにヘレンの実像を見ることができる。ヘレンもフランクと同様に過去を逃れて現在から未来へ生きようとするが、マラマッドは短編 *The Lady of the Lake* でも示しているように「過去を離れて現在も未来も存在しないし、過去に根ざした現在の自己を見出すとき未来が開かれる」⁽⁸⁾ ことを示唆している。

さて、以上の考察からもわかるように、*The Assistant* におけるアメリカの夢を求める主人公モリス、フランク、ヘレンの実像は、いずれも、ストーリー展開の表面にかくれた陰影部分に見出される。物質的追求者として映る外面的な映像の中かではなく、内面的に「倫理性の高揚を求めて、苦しみに耐えて生き抜く受難の思想」を底流に、そこから、それぞれが己れの新しい *identity* を求めようとする精神的軌跡の中かに三者の実像をとらえることができる。

マラマッドは「人間は受難をとおして再生への道を見出す」という彼の一贯したテーマを追求しながら、同情、誠実、苦悩、忍従という古来の伝統的精神の智慧をアメリカという新しい未来世界で人間が共存してゆけるための必要条件として普遍化させることを示唆している。だからこそ、フランクは割礼を受けることに意義を見出せるのである。

参考文献

Leslie A. Field & Leslie W. Field, *Bernard Malamud and Critics* (New York Univ. Press. 1970), Sheldon J. Hershinow, *Bernard Malamud* (Frederick Ungar Pub. Co. 1984), Iska Alter, *the Good Man's Dilemma* (New York:

AMS Press, 1981), テキストとして Bernard Malamud, *The Assistant* (New York Farrar, Straus and Giroux, 1980) を用いた。

- 注(1) Sheldon J. Hershinow, “*The Prdodigal Son Returns: The Assistant,*” *Bernard Malamud*, (Frederick Ungar Pub. 1984), p. 29.
- (2) Bernard Malamud, *The Assistant* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1980) pp. 4~5. 以下引用は同じ版によるもので、英文、邦文とも本文中に頁数のみを示す。
- (3) Ihab Hassan, “*The Qualified Encounter,*” *Bernard Malamud and Critics*, eds. Leslie A. Field & Joyce W. Field (New York Univ. Press. 1970) p. 204.
- (4) Bernard Malamud: 短編作品における Ambivalence の意味, 中西勝之著 (調布学園女子短期大学研究紀要第17号) p. 45.
- (5) Shelden J. Hershinow, “*The Assistant*”: *Bernard Malamud* (Frederick Ungar Pub. 1984) p. 44.
- (6) Peter L. Hays, “*The Complex Pattern of Redemption,*” *Bernard Malamud and Critics*, eds. Leslie A. Field & Joyce W. Field (New york Univ. Press. 1970) p. 22.
- (7) Bernard Malamud: *The Magic Barrel* における象徴的イメージ, 中西勝之著 (調布学園女子短期大学研究紀要第18号) p. 23.
- (8) Peter L. Hays, “*The Complex Pattern of Redemption,*” *Bernard Malamud and Critics*, pp. 226~227.
- (9) Ihab Hassan, “*The Qualified Encounter, Bernard Malamud and Critics*, p. 206.
- (10) Peter L. Hays, “*The Complex Pattern of Redemption,*” *Bernard Malamud and Critics*, p. 222.
- (11) Charles A. Hoyt, “*The New Romantism,*” *Bernard Malamud and Critics*, eds. Leslie A. Field & Joyce W. Field (New York Univ. Press. 1970) p. 171.
- (12) Peter L. Hays, “*The Complex Pattern of Redemption*” *Bernard Malamud and Critics*, pp. 222~227.
- (13) Walter Shear, “*Culture Conflict*” *Bernard Malamud and Critics*, eds. Leslie A. Field & Joyce W. Field (New York Univ. Preaa. 1970) p. 208.
- (14) Theodore Solotaroff, “*The Old Life and the New, Bernard Malamud and Critics*, eds. Leslie A. Field & Joyce W. Field (New York Udiv. Press. 1970) p. 236.

- (15) Iska Alter, *The Good Nan's Dilemma* (New York: AMS Press. Inc. 1981) p. 22.
- (16) Peter L. Hays, "The Complex Pattern of Redemption," *Bernard Malamud and Critics*, pp. 229-230.
- (17) Walter Shear, "Culture Conflict," *Bernard Malamud and Critics*, p. 207.
- (18) Bernard Malamud: *The Lady of the Lake* における Identity の追求, 中西勝之著 (調布学園女子短期大学研究紀要第19号) p. 63.

※ 引用文中下線は筆者による。